Oracle® Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java

ユーザーズ・ガイド

10*g* リリース 2（10.1.2.1）

部品番号 : B25072-01

2005 年 10 月

ORACLE®

Oracle Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java ユーザーズ・ガイド , 10*g* リリース 2（10.1.2.1）

部品番号 : B25072-01

原本名 : Oracle Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java User's Guide, 10*g* Release 2 (10.1.2.1)

原本部品番号 : B13919-03

Copyright © 2005 Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Retek は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに v

対象読者 vi
ドキュメントのアクセシビリティについて vi
関連ドキュメント vi
表記規則 vi
JGoodies 社の使用許諾契約 vii
サポートおよびサービス vii

1 Oracle Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java の概要

OracleBI Discoverer EUL Command Line for Java 1-2
OracleBI Discoverer Administrator Command Line Interface と Discoverer EUL Command Line for Java の違い 1-3
Discoverer EUL Command Line for Java コマンド 1-3
Discoverer EUL Command Line for Java コマンド修飾子 1-3
Discoverer EUL Command Line for Java の使用に必要な権限 1-4
Discoverer EUL Command Line for Java コマンドの実行方法 1-4
- コマンド・プロンプトに直接コマンドを入力する方法 1-5
- コマンド・ファイルに保存されているコマンドを実行する方法 1-5

Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のトラブルシューティング 1-6
ワイルドカードを使用した EUL オブジェクトの指定 1-6
コマンドの例 1-7
コマンド・ファイル 1-8
コマンド・ファイルの例 1-8
Discoverer EUL Command Line for Java コマンドのリスト 1-9

2 Discoverer EUL Command Line for Java リファレンス

このマニュアルで使用するコマンド構文表記規則 2-2
コマンドの構文 2-3
Oracle Discoverer EUL Command Line for Java の使用におけるルール 2-3
OracleBI Discoverer EUL Command Line for Java コマンドで使用する OracleBI Discoverer レジストリ変数の設定 2-4
Discoverer EUL Command Line for Java コマンド・リファレンス 2-5
- -asm 2-5
- -cmdfile 2-5
- -connect 2-6
- -create_eul 2-7
- -delete 2-8

-delete_eul 2-9
-export 2-10
-grant_privilege 2-11
-help 2-12
-import 2-13
-load 2-14
-refresh_business_area 2-15
-refresh_folder 2-16
-refresh_summary 2-16
-revoke_privilege 2-17
Discoverer EUL Command Line for Java コマンド修飾子リファレンス 2-18
-aggregate 2-18
-all 2-18
-apps_fndnam 2-18
-apps_fndnam_password 2-18
-apps_gwyuid 2-19
-apps_grant_details 2-19
-apps_mode 2-19
-apps_responsibility 2-19
-apps_security_group 2-20
-apps_user 2-20
-asm_policy 2-20
-asm_space, -asm_tablespace 2-21
-audit_info 2-21
-auto_gen_name 2-21
-auto_refresh 2-22
-auto_summaries 2-22
-auto_upgrade 2-22
-ba_link 2-23
-business_area 2-23
-business_area_access 2-23
-business_area_admin_access 2-24
-business_area_and_contents 2-24
-capitalize 2-24
-character_set_encoding 2-24
-condition 2-25
-date_hierarchy 2-25
-db_link 2-25
-default_tablespace 2-25
-description 2-25
-eul 2-26
-eul_language 2-26
-external_element 2-26
-folder 2-27
-function 2-27
-hier_node 2-27
-hierarchy 2-27
-identifier 2-28
-import_rename_mode 2-28
-item 2-29
-item_class 2-29

-join 2-29
-keep_format_properties 2-29
-log 2-30
-log_only 2-30
-lov 2-30
-object 2-30
-overwrite 2-31
-password 2-31
-preserve_workbook_owner 2-31
-private 2-31
-privilege 2-32
-remove_prefix 2-33
-replace_blanks 2-34
-role 2-34
-schema 2-34
-set_created_by 2-34
-set_created_date 2-35
-set_updated_by 2-35
-set_updated_date 2-35
-sort_folders 2-35
-sort_items 2-36
-source 2-36
-summary 2-36
-temporary_tablespace 2-36
-user 2-37
-wildcard 2-37
-workbook 2-37
-workbook_access 2-38
-xml_workbooks 2-38

A Discoverer EUL Command Line for Java エラー・メッセージ

Discoverer EUL Command Line for Java エラー・メッセージ A-2

B Discoverer のコマンドライン・インタフェース間の構文の違い

Discoverer のコマンドライン・インタフェース間の構文の違い B-2

索引

はじめに

『Oracle Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java ユーザーズ・ガイド』へようこそ。このユーザーズ・ガイドには、Discoverer EUL Command Line for Java 用のリファレンスも記載されています。

このマニュアルを効果的に利用するには、まず Discoverer EUL について熟知することをお薦めします。最新情報は、このマニュアルとあわせて Oracle Business Intelligence のリリース・ノートを参照してください。

対象読者

このマニュアルは、Discoverer 管理者、Oracle Applications 管理者および Discoverer EUL を管理する必要のあるユーザーを対象としています。また、読者が Discoverer End User Layer（EUL）の実用的な知識を身に付けていることを前提としています。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト http://www.oracle.com/accessibility/ を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし一部のスクリーン・リーダーは括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

関連ドキュメント

このマニュアルで参照されているドキュメントおよび Oracle Business Intelligence に関するその他の情報（ホワイト・ペーパー、ベスト・プラクティス、最新版ドキュメントなど）は、Oracle Technology Network Japan（http://otn.oracle.co.jp/）から入手できます。

表記規則

次の表に、このマニュアルで使用される表記規則を示します。

表記規則	意味
太字	太字は、処理に関連付けられたグラフィカル・ユーザー・インタフェース要素、または本文や用語集で定義されている用語を示します。
イタリック	イタリックは、特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、URL、サンプル・コード、画面上に表示されるテキストまたはユーザーが入力するテキストを示します。
< >	山カッコは、カッコ内の文字列がユーザー指定の名前または値であることを表します。
[]	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。

コマンド構文表記規則の詳細は、「このマニュアルで使用するコマンド構文表記規則」を参照してください。

JGoodies 社の使用許諾契約

Oracle Business Intelligence には、JGoodies 社のソフトウェアが組み込まれています。このソフトウェアの使用許諾契約は次のとおりです。

Copyright© 2003 JGoodies Karsten Lentzsch.All rights reserved.

Redistribution and use in source and binary forms, with or without modification, are permitted provided that the following conditions are met:

- Redistributions of source code must retain the above copyright notice, this list of conditions and the following disclaimer.
- Redistributions in binary form must reproduce the above copyright notice, this list of conditions and the following disclaimer in the documentation and/or other materials provided with the distribution.
- Neither the name of JGoodies nor the names of its contributors may be used to endorse or promote products derived from this software without specific prior written permission.

THIS SOFTWARE IS PROVIDED BY THE COPYRIGHT HOLDERS AND CONTRIBUTORS "AS IS" AND ANY EXPRESS OR IMPLIED WARRANTIES, INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, THE IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE ARE DISCLAIMED.IN NO EVENT SHALL THE COPYRIGHT OWNER OR CONTRIBUTORS BE LIABLE FOR ANY DIRECT, INDIRECT, INCIDENTAL, SPECIAL, EXEMPLARY, OR CONSEQUENTIAL DAMAGES (INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, PROCUREMENT OF SUBSTITUTE GOODS OR SERVICES; LOSS OF USE, DATA, OR PROFITS; OR BUSINESS INTERRUPTION) HOWEVER CAUSED AND ON ANY THEORY OF LIABILITY, WHETHER IN CONTRACT, STRICT LIABILITY, OR TORT (INCLUDING NEGLIGENCE OR OTHERWISE) ARISING IN ANY WAY OUT OF THE USE OF THIS SOFTWARE, EVEN IF ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGE.

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

オラクル社カスタマ・サポート・センター

オラクル製品サポートの購入方法、およびオラクル社カスタマ・サポート・センターへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

`http://www.oracle.co.jp/support/`

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

`http://otn.oracle.co.jp/document/`

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

`http://www.oracle.co.jp/education/`

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

`http://www.oracle.co.jp`
`http://otn.oracle.co.jp`

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

1

Oracle Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java の概要

この章では、OracleBI Discoverer EUL Command Line for Java について説明します。説明する項目は次のとおりです。

- OracleBI Discoverer EUL Command Line for Java
- OracleBI Discoverer Administrator Command Line Interface と Discoverer EUL Command Line for Java の違い
- Discoverer EUL Command Line for Java コマンド
- Discoverer EUL Command Line for Java コマンド修飾子
- Discoverer EUL Command Line for Java の使用に必要な権限
- Discoverer EUL Command Line for Java コマンドの実行方法
- Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のトラブルシューティング
- ワイルドカードを使用した EUL オブジェクトの指定
- コマンドの例
- コマンド・ファイル
- コマンド・ファイルの例
- Discoverer EUL Command Line for Java コマンドのリスト

OracleBI Discoverer EUL Command Line for Java

OracleBI Discoverer EUL Command Line for Java はテキスト・ベースの一連のコマンドで、これにより Discoverer EUL を作成および操作できます。

注意 : Oracle 以外のデータベースへの接続には異機種間サービスを使用します。ただし、この場合でも EUL は Oracle データベースに保存されます。Oracle 以外のデータベースの使用の詳細は、『Oracle Database Heterogeneous Connectivity 管理者ガイド』を参照してください。

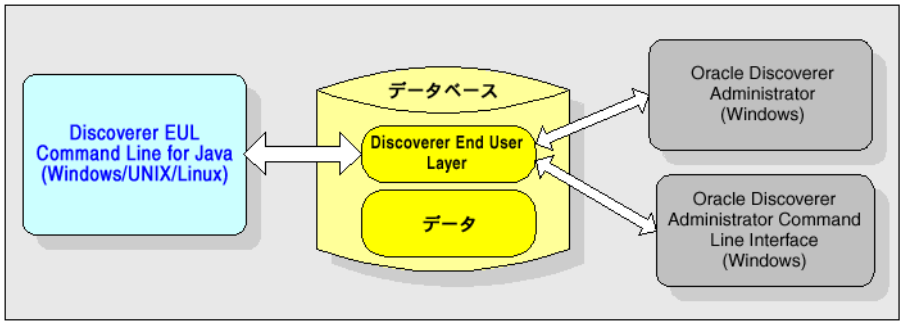
Discoverer EUL Command Line for Java は Java 環境で稼動します。そのため、どのような Java 互換プラットフォーム（Windows、UNIX、Linux など）からでも実行可能です。たとえば、UNIX マシンから EUL をリフレッシュ（またはパッチを適用）できます。

下の図は、Discoverer EUL を操作するための次の 3 つの方法を示しています。

- このマニュアルで説明されているように、Discoverer EUL Command Line for Java を Windows、UNIX または Linux のいずれかで使用する。
- Windows マシン上で OracleBI Discoverer Administrator を使用する。
- Windows マシン上で OracleBI Discoverer Administrator Command Line Interface を使用する。

  注意 : OracleBI Discoverer Administrator Command Line Interface を実行するには、マシン上に OracleBI Discoverer Administrator がインストールされている必要があります。

図 1-1 Discoverer EUL との Discoverer インタフェース



注意

- Discoverer EUL ファイルの拡張子は .EEX です（Sales_eul.eex など）。
- Discoverer EUL Command Line for Java コマンドのリストは、「Discoverer EUL Command Line for Java コマンドのリスト」を参照してください。

OracleBI Discoverer Administrator Command Line Interface と Discoverer EUL Command Line for Java の違い

Discoverer EUL Command Line for Java の多くは OracleBI Discoverer Administrator Command Line Interface との互換性を持っています。OracleBI Discoverer Administrator Command Line Interface 用に記述されたコマンドおよびスクリプトは、Discoverer EUL Command Line for Java 上で実行できるように簡単に変換できます。

OracleBI Discoverer Administrator Command Line Interface と Discoverer EUL Command Line for Java は、次の点が異なります。

- Discoverer EUL Command Line for Java は複数のプラットフォーム上で実行可能だが、OracleBI Discoverer Administrator Command Line Interface は Windows 上でのみ実行可能。

  注意 : Discoverer EUL Command Line for Java を実行するために、OracleBI Discoverer Administrator をインストールする必要はありません。

- Discoverer EUL Command Line for Java コマンドには、eulapi という接頭辞が付く。
- Discoverer EUL Command Line for Java には付加的なコマンドが含まれる（たとえば、データベース権限の付与や取消しには、-grant_privilege コマンドおよび -revoke_privilege コマンドを使用します）。
- 一部のコマンドでは、構文に若干の違いがある（詳細は、「Discoverer のコマンドライン・インタフェース間の構文の違い」を参照してください）。

Discoverer EUL Command Line for Java コマンド

Discoverer EUL Command Line for Java コマンドとは、Discoverer EUL をある一定の方法で操作するための命令です。例を次に示します。

- -connect コマンド。指定されているユーザー名、パスワードおよびデータベースを使用して、データベースに接続します。たとえば、*my_database* データベースにユーザー *jchan* として接続する場合は、次のようになります。

  ```
  eulapi -connect jchan/12345@my_database
  ```

- -import コマンド。指定されている Discoverer EUL エクスポート・ファイル（.EEX 拡張子のファイル）から、EUL オブジェクトを現行の EUL へインポートします。たとえば、ファイル c:¥data¥sales.eex から EUL オブジェクトをインポートする場合は、次のようになります。

  ```
  eulapi -connect jchan/12345@my_database -import c:¥data¥sales.eex
  ```

Discoverer EUL Command Line for Java コマンド修飾子

Discoverer EUL Command Line for Java コマンド修飾子とは、コマンドの修飾や詳細な指定のための命令です。例を次に示します。

- -log コマンド修飾子。ログ・ファイルを作成し、コマンド実行時の処理情報を保存します。たとえば、ファイル c:¥data¥sales.eex から EUL オブジェクトをインポートし、ログ・データを sales_import_logfile.txt に保存する場合は、次のようになります。

  ```
  eulapi -connect jchan/12345@my_database -import c:¥data¥sales.eex -log sales_
  import_logfile.txt
  ```

- -item コマンド修飾子。このコマンド修飾子を -delete コマンドと組み合せて使用すると、EUL から削除する EUL アイテムを指定できます。たとえば、アイテム sales.profit を削除する場合は、次のようになります。

  ```
  eulapi -connect jchan/12345@my_database -delete -item sales.profit
  ```

Discoverer EUL Command Line for Java の使用に必要な権限

Discoverer EUL Command Line for Java を使用するには、データベースへの接続に使用するデータベース・ユーザー名に対して、次のデータベース権限を付与しておく必要があります。

- CREATE SESSION
- CREATE TABLE
- CREATE VIEW
- CREATE SEQUENCE
- CREATE PROCEDURE

データベース・ユーザー名には、デフォルトの表領域およびデフォルト表領域の割当て制限も必要です。権限の付与の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

Discoverer EUL Command Line for Java コマンドの実行方法

Discoverer EUL Command Line for Java は、次の 2 通りの方法で実行できます。

- コマンド・プロンプトに直接コマンドを入力する（詳細は、「コマンド・プロンプトに直接コマンドを入力する方法」を参照してください）。
- コマンド・ファイルに保存されているコマンドを実行する（詳細は、「コマンド・ファイルに保存されているコマンドを実行する方法」を参照してください）。

注意：

- eulapi スクリプトは <ORACLE_HOME>/bin にあります。
- <ORACLE_HOME>/lib ディレクトリが CLASS PATH に登録されていることを確認してください。
- OracleBI Discoverer Administrator Command Line Interface コマンドと Discoverer EUL Command Line for Java コマンドとの間に互換性を持たせるには、修正が必要です（詳細は、「OracleBI Discoverer Administrator Command Line Interface と Discoverer EUL Command Line for Java の違い」を参照してください）。
- EUL 内の EUL オブジェクトのリストを確認するには、すべての EUL オブジェクトをエクスポートしてリストを検証できるようにします。例を次に示します。

```
eulapi -connect jchan/12345@my_database -export objectlist.xml -all % -wildcard
```

コマンド・プロンプトに直接コマンドを入力する方法

UNIX マシンから EUL にパッチを適用する場合は、コマンド・プロンプトに直接コマンドを入力します。

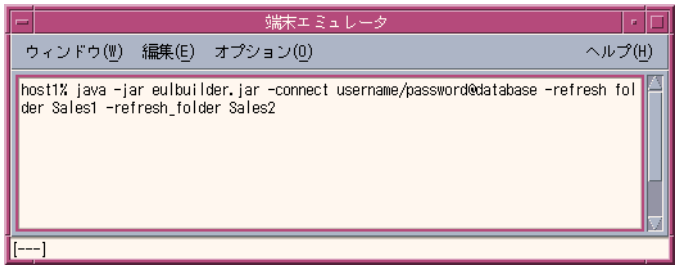
コマンド・プロンプトに直接コマンドを入力するには、次の操作を行います。

1. コマンド・プロンプト画面（UNIX のコマンド・プロンプトなど）を開きます。
2. コマンド・プロンプトに直接コマンドを入力します。

   たとえば、「Sales1」および「Sales2」というフォルダをリフレッシュするには、次のように入力します（次の図を参照）。

```
eulapi -connect jchan/12345@my_database -refresh_folder Sales1 -refresh_folder Sales2
```

図 1-2 UNIX のコマンド・プロンプトでの Discoverer EUL Command Line for Java の使用方法



コマンド・ファイルに保存されているコマンドを実行する方法

EUL の定期的な更新を実行する場合は、コマンド・ファイルに保存されているコマンドを実行します。

コマンド・ファイルに保存されているコマンドを実行するには、次の操作を行います。

1. テキスト・ファイル（import.txt など）を作成して、そのテキスト・ファイルにコマンドを入力します。
2. コマンド・プロンプト画面（UNIX のコマンド・プロンプトなど）を開きます。
3. コマンド・プロンプトで、-cmdfile コマンドと、その後にコマンド・ファイルの名前を入力します。

   たとえば、import.txt に保存されているコマンドを実行するには、次のように入力します。

```
eulapi -connect jchan/12345@my_database -cmdfile import.txt
```

コマンド・ファイルの詳細は、「コマンド・ファイル」を参照してください。

注意：

- -cmdfile コマンドを繰り返し使用すれば、複数のコマンド・ファイルを実行することもできます。たとえば、テキスト・ファイル login.txt に保存されているコマンドを実行し、次に import.txt に保存されているコマンドを実行するには、次のように入力します。

```
eulapi -cmdfile c:¥scripts¥login.txt -cmdfile c:¥scripts¥import.txt
```

Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のトラブルシューティング

Discoverer EUL Command Line for Java はログ機能を提供します。ログ機能を使用すると、次のように、データを変更することなくコマンドをテストすること（影響分析の場合など）や、問題のトラブルシューティングができます。

- データを変更しないで行うコマンドのテスト

  データを変更せずにコマンドをテストするには、-log <*log file name*> -log_only 修飾子を使用します。例を次に示します。

  ```
  -log <log file name> -log_only
  ```

  この修飾子により、データを変更することなくコマンドが実行され、その際に問題が発生したかどうかを示すログ・ファイルが生成されます。詳細は、「-log_only」を参照してください。

- 問題のトラブルシューティング

  問題をトラブルシュートするには、-log <*log file name*> 修飾子を使用して、コマンド処理情報を保存します。

  たとえば、コマンドを実行すると、Discoverer の処理が完了したことを示す「コマンドは正常に完了しました。」というメッセージが表示されます。操作が正常に行われたかどうかを確認するには、-log 修飾子によって生成されたログ・ファイルを確認します。

  たとえば、サマリー・フォルダに使用されている「Store 4」というフォルダを削除しようとすると、画面には「コマンドは正常に完了しました。」というメッセージが表示されます。しかし、ログ・ファイルには、次のように、コマンドが実行できなかった理由の詳細が示されます。

  ```
  java EulCommandLine -connect jchan/12345@my_database -delete -folder Store 4 -log
  Started <date and time>...
  Deleting folder Store 4...
  Element Store 4 cannot be deleted because it is used in a summary
  Completed <date and time>.
  ```

ワイルドカードを使用した EUL オブジェクトの指定

Discoverer EUL Command Line for Java を使用する場合は、ワイルドカードを使用して、操作する EUL オブジェクトのグループを指定できます。ワイルドカードは、他の文字のかわりに使用する特殊な文字です。たとえば、名前が BI_ で始まる OLAP 機能をインポートする場合などがあります。

使用できるワイルドカードは次の 2 つです。

- パーセント記号（%）。この記号は、一致する文字の数がゼロ（つまり、一致する文字がない）または 1 文字以上であることを示します。
- アンダースコア（_）。この記号は一致する文字の数が厳密に 1 文字であることを示します。

ワイルドカードは、次の操作に使用できます。

- EUL オブジェクトの削除
- EUL オブジェクトのエクスポート
- EUL オブジェクトのインポート
- フォルダ、ビジネスエリアおよびサマリー・フォルダのリフレッシュ
- ワークブックおよびビジネスエリアに対する権限の付与および取消し

ワイルドカードはアイテム名または識別子と組み合せて使用できます。ワイルドカードを使用する場合は、コマンドに -wildcard 修飾子を付加します（詳細は、「-wildcard」を参照してください）。

パーセント・ワイルドカードを使用して EUL オブジェクトを指定する方法

1. パーセント記号（%）は、後ろに -wildcard 修飾子を付けて使用します。

   たとえば、表示名が A で始まるすべてのビジネスエリアを削除する場合は、次のようになります。

   ```
   eulapi -connect jchan/12345@my_database -delete -business_area A% -wildcard
   ```

アンダースコア・ワイルドカードを使用して EUL オブジェクトを指定する方法

1. アンダースコア（_）は、後ろに -wildcard 修飾子を付けて使用します。

   たとえば、A の後に任意の文字が続き、その後に C が続くという識別子を持つすべてのビジネスエリアを削除する場合には、次のようになります。

   ```
   eulapi -connect jchan/12345@my_database -delete -business_area A_C -identifier
   -wildcard
   ```

注意：

- パーセント・ワイルドカード文字とアンダースコア・ワイルドカード文字は組み合せることができます。
- -wildcard 修飾子を省略すると、パーセント記号（%）やアンダースコア（_）はリテラル文字と解釈されます。つまり、コマンド -delete -business_area A% では、A% というビジネスエリアの削除が試行されます。

コマンドの例

例 1

Sales EUL から「Sales」フォルダおよび「Sum1」サマリーを削除するには、次のコマンドを使用します。

```
eulapi -connect jchan/12345@my_database -delete -folder Sales -summary Sum1 -eul Sales
```

例 2

「Sales1」フォルダおよび「Sales2」フォルダをリフレッシュするには、次のコマンドを使用します。

```
eulapi -connect jchan/12345@my_database -refresh_folder Sales1 -refresh_folder Sales2
```

例 3

ユーザー jchan としてデータベースに Applications モード EUL を作成し、Applications ユーザー名およびパスワードが *apps/apps* でのアクセス権を付与するには、次のコマンドを使用します。

```
eulapi -connect eul_owner:appsresp/appspwd -create_eul -apps_mode -apps_grant_details
apps/apps -user jchan -password 123456
```

注意

- この他の例は、「Discoverer EUL Command Line for Java リファレンス」に紹介されています。

コマンド・ファイル

コマンド・ファイルとは、1 つ以上の Discoverer EUL Command Line for Java コマンドが記述されているテキスト・ファイルのことです。コマンド・ファイルを使用すると、コマンド・プロンプトにコマンドを手動で入力する必要がなく、コマンドを自動的に実行できます。
MS-DOS または UNIX の知識がある場合は、コマンド・ファイルの機能は MS-DOS バッチ・ファイルや UNIX スクリプト・ファイルと同様と理解してください。

注意

- コマンド・ファイル内のコマンドは、コマンド・プロンプトに直接入力した場合と同等に処理されます。
- コマンド・ファイルに組み込まれた改行は無視されます。
- 1 つのコマンド・ファイルによって他のコマンド・ファイルを次々と起動できます。

コマンド・ファイルの例

次の 3 つのコマンド・ファイルの例を説明します。

1. '-connect jchan/12345@my_database' と記述されている connect.txt
2. '-create_eul -log create.log' と記述されている create.txt
3. '-delete_eul -log delete.log' と記述されている delete.txt

次の例で示すように、これらのコマンド・ファイルは様々な組合せで使用できます。

例 1

データベースに接続するには、次のコマンドを使用します。

```
eulapi -cmdfile connect.txt
```

例 2

データベースに接続し、EUL を作成して、処理情報をログ・ファイルに保存するには、次のコマンドを使用します。

```
eulapi -cmdfile connect.txt -cmdfile create.txt
```

例 3

データベースに接続し、EUL を削除して、処理情報をログ・ファイルに保存するには、次のコマンドを使用します。

```
eulapi -cmdfile connect.txt -cmdfile delete.txt
```

Discoverer EUL Command Line for Java コマンドのリスト

次のテーブルは、Discoverer EUL Command Line for Java コマンドのリストです。

コマンド	用途
-asm <modifiers>	自動サマリー管理（ASM）
-cmdfile <*command file*>	コマンド・ファイルに保存されているコマンドの実行
-connect <*username*>/<*password*> [@<*database*]	EUL への接続
-create_eul <modifiers>	EUL の作成
-delete <modifiers>	EUL オブジェクトの削除
-delete_eul <modifiers>	EUL の削除
-export <*export file*> <modifiers>	EUL オブジェクトのエクスポート
-grant_privilege <modifiers>	データベース・ユーザーへの Discoverer 権限の付与
-help [*command name(s)*] [-all]	オンライン・ヘルプの表示
-import <*import file(s)*> <modifiers>	EUL オブジェクトのインポート
-load <*business area*> <modifiers>	ビジネスエリアのロード
-refresh_business_area <*business area(s)*> <modifiers>	ビジネスエリアのリフレッシュ
-refresh_folder <*folder name(s)*> <modifiers>	フォルダのリフレッシュ
-refresh_summary <*summary name(s)*> <modifiers>	サマリー・フォルダのリフレッシュ
-revoke_privilege <modifiers>	データベース・ユーザーからの Discoverer 権限の削除

注意：コマンド修飾子の詳細は、コマンド・リファレンスの項で説明します（詳細は、「Discoverer EUL Command Line for Java リファレンス」を参照してください）。

2

Discoverer EUL Command Line for Java リファレンス

この章では、Discoverer EUL Command Line for Java に関するリファレンス情報について詳細に説明します。説明する項目は次のとおりです。

- このマニュアルで使用するコマンド構文表記規則
- コマンドの構文
- Oracle Discoverer EUL Command Line for Java の使用におけるルール
- OracleBI Discoverer EUL Command Line for Java コマンドで使用する OracleBI Discoverer レジストリ変数の設定
- Discoverer EUL Command Line for Java コマンド・リファレンス
- Discoverer EUL Command Line for Java コマンド修飾子リファレンス

このマニュアルで使用するコマンド構文表記規則

このマニュアルでは次の構文表記規則を使用します。

- コマンドおよびコマンド修飾子はプレーン・テキストで表示し、接頭辞としてダッシュ (-) が付いている。

  ヒント : ダッシュは実際に入力します。

- 必須のコマンド引数およびコマンド修飾子は山カッコ < > で囲まれている。

  ヒント : 山カッコは実際には入力しません。

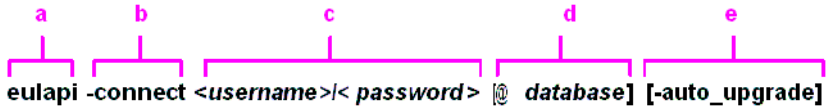
- オプションのコマンド引数およびコマンド修飾子は大カッコ [] で囲まれている。

  ヒント : 大カッコは実際には入力しません。

- コマンド引数が変数（ユーザーが値を入力）の場合は斜体で表記する。
- オプションがパイプ文字（|）で区切られている箇所は、リストから 1 つを選択することを表す。たとえば、source <server | gateway> は、「source server」または「source gateway」のいずれかを入力するという意味です。

  注意 : パイプ文字は実際には入力しません。

図 2-1 このマニュアルで使用するコマンド表記規則



図の要点 :

1. Discoverer EUL Command Line for Java 実行ファイル
2. コマンド
3. 変数によるコマンド引数（必須）。この場合は、ユーザー名およびパスワードをスラッシュ文字（/）で区切って入力します。
4. オプションのコマンド引数。この場合は、データベース名を入力します。
5. オプションのコマンド修飾子。

コマンドの構文

Discoverer EUL Command Line for Java コマンドには、次の構文を使用します。

```
eulapi -connect <username>/<password>[@database] <-command> [-argument(s)] [-modifiers]
[-argument(s)]
```

注意

- コマンドおよび修飾子は、大文字と小文字を区別しません。つまり、大文字と小文字を入れ換えても使用できます。
- コマンド引数が変数の場合は、大文字と小文字を区別することがあります。たとえば、EUL 名や表領域名などです。つまり、VIDEO5 という名前の EUL は、Video5 や video5 ではなく、VIDEO5 と指定する必要があります。
- コマンドを記述する順序は自由です。ただし、各コマンドに対応する引数は、各コマンドの直後に正しい順序で記述する必要があります。
- コマンド修飾子を記述する順序は自由です。ただし、各修飾子に対応する引数は、各修飾子の直後に正しい順序で記述する必要があります。
- コマンドは、改行を入れずに 1 行で入力する必要があります。
- ある操作を複数の EUL オブジェクトに対して実行するには、各 EUL オブジェクトに対してオプションのコマンド修飾子を繰り返し指定します。

  たとえば、「Sales1」フォルダおよび「Sales2」フォルダをリフレッシュするには、-refresh_folder コマンドを次のように繰り返し指定します。

  ```
  eulapi -connect jchan/12345@my_database -refresh_folder Sales1 -refresh_folder
  Sales2
  ```

- スペースまたは特殊文字を含むアイテム名や識別子を指定するときは、二重引用符（""）で囲みます。たとえば、「Video Analysis Information」という名前のフォルダの場合、フォルダ名は "Video Analysis Information" と指定します。
- コマンド・ファイルに接続の詳細（-connect username/password@database など）を記述した場合は、eulapi セクションの後に -connect コマンドを入れる必要はありません。つまり、connect.txt に接続の詳細が保存されている場合は、次のようなコマンドを使用してデータベースに接続できます。

  ```
  eulapi -cmdfile connect.txt
  ```

Oracle Discoverer EUL Command Line for Java の使用におけるルール

Discoverer EUL Command Line for Java を使用する場合は、次のルールが適用されます。

- 接続情報の指定時にオプションの *<database>* 引数を省略すると、使用中のマシンにインストールされている Oracle データベースに接続されます。マシン上に複数のデータベースがインストールされているか、別のマシン上のデータベースに接続するときは、オプションの *<database>* 引数を使用してください。
- オブジェクト名が必要な箇所にオブジェクト名を指定しなかった場合は、データベース・ユーザー名に対応するデフォルトのオブジェクトが使用されます。たとえば、EUL を指定せずに -eul 修飾子を使用すると、現行のデータベース・ユーザー名のデフォルト EUL が適用されます。EUL の指定の詳細は、「-eul」を参照してください。
- ほとんどすべてのコマンドは、Oracle データベースおよび Oracle 以外のデータベースの両方で使用できます。例外は、-refresh_summary コマンドのみです。-refresh_summary コマンドは Oracle データベース以外では使用できません（詳細は、「-refresh_summary」を参照してください）。
- Discoverer EUL オブジェクトの指定には、アイテム名（フォルダ名など）または識別子（EUL オブジェクトに割り当てられた一意の ID）のいずれかを使用できます。たとえば、Discoverer フォルダの名前が「Sales」で、その識別子が SALES_132388 の場合、このフォ

ルダを -refresh_folder コマンドの引数として指定するには、次のいずれの方法でもかまいません。

- -refresh_folder Sales
- -refresh_folder SALES_132388 -identifier

ヒント: EUL オブジェクトを指定する場合は、可能なかぎりアイテム名ではなく識別子を使用してください。識別子を使用することにより、翻訳関連の問題や、名前が任意に変更されることによって発生する EUL の更新問題を回避できます（詳細は、-identifier を参照してください）。

Discoverer 識別子の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

- リモート・データベースにアクセスするには、このデータベースの Transparent Network Substrate（TNS）設定を tnsnames.ora ファイルに保存しておく必要があります。

  TNS 設定の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

OracleBI Discoverer EUL Command Line for Java コマンドで使用する OracleBI Discoverer レジストリ変数の設定

OracleBI Discoverer EUL Command Line for Java に用意されている一部のコマンドを使用する際には、必要に応じて、次に示す特定の Discoverer レジストリ変数を明示的に設定してください。

コマンド	Discoverer レジストリ変数
-export	■ ArchiveCacheFlushInterval ■ FormatXMLExportJoinFromMaster
refresh_*object*	■ DefaultPreserveDisplayPropertyForRefresh ■ EnableTriggers
-import	■ FormatXML
-connect -apps_user	■ AppsFNDNAM ■ AppsGWYUID
-load	■ SetNULLItemHeadingOnBulkLoad ■ MaxNumberJoinPredicates
すべてのコマンド	■ SqlTrace

Windows プラットフォームでは、Discoverer レジストリ変数は Windows レジストリに格納されます。Linux、Solaris および HP-UX プラットフォームでは、Discoverer レジストリ変数は `.reg_key.dc` ファイルに格納されます。

これらの Discoverer レジストリ変数を設定するには、次のようにします。

- コマンド・プロンプトで次のように入力して、必要なレジストリ変数の値を指定します。

  ```
  dis51pr -setadminpref registry_variable_name value
  ```

  たとえば、-import 睦 efresh オプションを使用する前に、次のコマンドを入力して DefaultPreserveDisplayPropertyForRefresh 値を 1 に設定できます。

  ```
  dis51pr -setadminpref DefaultPreserveDisplayPropertyForRefresh=1
  ```

Discoverer レジストリ変数（説明、デフォルト値、許容値を含む）の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

Discoverer EUL Command Line for Java コマンド・リファレンス

この項では、Discoverer EUL Command Line for Java の各コマンドに関するリファレンス情報について詳細に説明します。次の点に注意してください。

- コマンドはアルファベット順に記載されています。
- コマンドは、コマンド修飾子を使用して詳細に指定できます（詳細は、「Discoverer EUL Command Line for Java コマンド修飾子リファレンス」を参照してください）。

-asm

このコマンドは、Discoverer の自動サマリー管理機能（ASM）を管理するときに使用します。

情報	詳細
構文	`-asm -asm_space <bytes> [modifiers]`| `-asm_space <bytes> -asm_tablespace <tablespace name> [modifiers]`
修飾子	-asm_space, -asm_tablespace -log <*log file name*> [-log_only]
注意	-asm_space, -asm_tablespace 修飾子を指定しなかった場合は、ASM ポリシーの表領域および領域が使用されます。
例	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -asm -asm_space 2182 -asm_tablespace user_data`

注意：Discoverer の自動サマリー管理機能の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

-cmdfile

このコマンドは、テキスト・ファイルに保存されている Discoverer EUL Command Line for Java コマンドを自動的に実行するときに使用します。

情報	詳細
構文	`-cmdfile <command file> [modifiers]`
修飾子	-character_set_encoding <*character set*>
注意	コマンド・ファイルを作成するには、標準のテキスト・エディタを使用して、1 つ以上の Discoverer EUL Command Line for Java コマンドを含むテキスト・ファイルを作成します。テキスト・ファイル内のコマンドを実行するには、コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力します。 `eulapi -cmdfile <command file>` <*command file*> を指定するときにディレクトリ・パスの入力を省略すると、デフォルトの Discoverer EUL Command Line for Java ディレクトリが適用されます。 詳細は、「コマンド・ファイル」を参照してください。
例	例 1: テキスト・ファイル refresh.txt に保存されているコマンドを実行するには、コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力します。 `eulapi -connect jchan/12345@my_database -cmdfile c:¥scripts¥refresh.txt`

-connect

このコマンドを使用すると、データベース・ユーザー名およびパスワードを指定して、EUL に接続できます。

情報	詳細
構文	`-connect <username>/<password>[@database][modifiers]`
修飾子	-apps_fndnam *<foundation name>* -apps_fndnam_password *<foundation name password>* -apps_gwyuid *<gateway user ID>* -apps_responsibility *<responsibility>* -apps_security_group *<security group>* -apps_user -auto_upgrade -eul *<EUL>* -log *<log file name>* [-log_only]
注意	*<database>* を使用して指定するデータベースは、次のいずれかである必要があります。 ■ マシン上の tnsnames.ora ファイルに記述されている。 ■ *<database>* 文字列内に完全なデータベース詳細（アドレス、プロトコル、ポート、SID など）が記述されている。 たとえば、(DESCRIPTION = (ADDRESS_LIST = (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP)(HOST = hostname.organization.com)(PORT = 1523))) (CONNECT_DATA = (SID = VIS))) など。 データベースを指定しなかった場合は、指定したユーザー名のデフォルト・データベースが使用されます。

例	例 1: Oracle Applications ユーザー名とパスワードを指定する、一般的な Oracle Applications 接続
	`eulapi -connect sysapps/sysapps@apps_db -apps_user apps -apps_responsibility "sysresp1 UK" -eul AppsEUL`
	例 2: Oracle Applications ユーザー名と FNDNAM パスワードを指定する、新規の Oracle Applications 接続
	`eulapi -connect sysapps/sysapps@apps_db -apps_user -apps_responsibility sysresp1 -fndnam_password APPS -eul AppsEUL`
	例 3: Oracle Applications 以外の接続
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -eul eultest`

-create_eul

このコマンドは、Discoverer EUL を作成するときに使用します。

注意：Oracle Applications モード EUL を作成するには、-apps_mode 修飾子を使用します。

情報	詳細
構文	`-create_eul [modifiers]`
修飾子	-apps_grant_details <*fnd user/password*> -apps_mode [-apps_grant_details] -default_tablespace <*default tablespace name*> -eul_language <*EUL language*> -log <*log file name*> [-log_only] -overwrite -password <*password*> -private -temporary_tablespace <*tablespace name*> -user <*username*>
注意	新しい EUL の所有者としてユーザー名を指定するには、-user コマンド修飾子を使用します。ユーザー名を指定しないと、現行の接続ユーザー名が新しい EUL の所有者になります。 新しい EUL の所有者となるユーザーが所有している既存の EUL を上書きするには、-overwrite コマンド修飾子を使用します。 新しい EUL をプライベートと指定するには、-private コマンド修飾子を使用します。新しい EUL に対するデフォルトの設定は public です。

例	例 1: welcome というパスワードを持つユーザー Bob に対してプライベート EUL を作成し、既存の EUL を上書きして、create.log という名前のファイル内にすべてのログ・エントリを記録するには、次のコマンドを入力します。
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -create_eul -overwrite -user bob -password welcome -private -log create.log`
	例 2: Oracle Applications モード EUL を作成するには、次のコマンドを入力します。
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -create_eul -apps_mode -apps_grant_details apps/apps`
	例 3: EUL を作成し、EUL テーブルを格納する表領域の詳細を指定するには、次のコマンドを入力します。
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -create_eul -user bob -password 3728372 -default_tablespace usr -temporary_tablespace temp`

-delete

このコマンドは、EUL から EUL オブジェクトを削除するときに使用します。

注意 : EUL 全体を削除するには、-delete_eul コマンドを使用します。

情報	詳細
構文	`-delete <modifiers>`
修飾子	-asm_policy <*ASM policy*> -business_area <*business area*> -business_area_and_contents <*business area*> -ba_link <*business area*>.<*folder*> -condition <*folder*>.<*condition*> -folder <*folder*> -function <*PL/SQL function*> -hierarchy < *hierarchy*> -hier_node <*hierarchy*>.<*hierarchy node*> -identifier -item <*folder*>.<*item*> -item_class <*item class*> -join <*join name*> -log <*log file name*> [-log_only] -summary <*summary*> -wildcard -workbook <*workbook*>
注意	EUL オブジェクトは一度に 1 つ以上削除できます（次の例を参照してください）。

例	例 1: eul51 という名前の EUL から「Test BA」および「Final BA」というビジネスエリアを削除し、delba.log ログ・ファイルにログを記録するには、次のコマンドを入力します。
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -delete -business_area "Test BA" -business_area "Final BA" -eul eul51 -log delba.log`
	例 2: eul51 という名前の EUL から「Sales」フォルダと「Sum1」サマリーを削除し、del.log ログ・ファイルに記録するには、次のコマンドを入力します。
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -delete -folder Sales -summary Sum1 -eul eul51 -log del.log`

情報	詳細
	例 3: EUL から 3 つのアイテムを削除します。削除するアイテムの識別子を delete.txt テキスト・ファイルに保存します。-identifier コマンド修飾子を指定すると、EUL アイテムはアイテム名ではなく識別子によって指定されます。ログ情報は delete08082003.log に保存されます。 **注意 :** delete.txt ファイルには、次のテキストが保存されています。 -item FII_ACCOUNTS.ACCOUNT_NO -item FII_ACCOUNTS.BANK -item FII_ACCOUNTS.LOCATION 次のコマンドを入力します。 `eulapi -delete -identifier -connect jchan/12345@my_database -cmdfile delete.txt -log delete08082003.log`

-delete_eul

このコマンドは、現行の Discoverer EUL を削除するときに使用します。

注意 : 個々の EUL オブジェクトを選択的に削除するには、-delete コマンドを使用します。

情報	詳細
構文	`-delete_eul`
修飾子	-log <*log file name*> [-log_only]
注意	自分が所有者として登録されている EUL のみを削除できます（この場合の所有者とは、-connect コマンドによって指定されたユーザー名を指します）。
例	例 1: EUL を削除して、処理詳細をログ・ファイルに保存するには、次のコマンドを使用します。 `eulapi -connect jchan/12345@my_database -delete_eul -log "c:¥my log dir¥delete_eul.log"`

-export

このコマンドは、EUL オブジェクトを Discoverer エクスポート・ファイル（.EEX 拡張子を持つファイル）にエクスポートするときに使用します。個々の EUL オブジェクト（フォルダ、ビジネスエリア、ファンクションなど）を選択的にエクスポートすることも、（-all 修飾子を使用して）EUL 全体をエクスポートすることもできます。

情報	詳細
構文	`-export <export file> <modifiers>`
修飾子	-all -asm_policy <*ASM policy*> -audit_info <*audit details*> -business_area <*business area*> -business_area_and_contents <*business area*> -external_element <*name of external XML file*> -folder <*folder*> -function <*function*> -hierarchy <*hierarchy*> -identifier -item_class <*item_class*> -log <*log file name*> [-log_only] -summary <*summary*> -wildcard -workbook <*workbook*> [-xml_workbooks]
注意	<*export file*> 引数には、EUL オブジェクトのエクスポート先となるターゲット EEX ファイル名を指定します。ディレクトリ・パスを指定しないと、ターゲット・ファイルはデフォルトの Discoverer フォルダに作成されます。ファイルのディレクトリ・パス（c:¥data¥sales.eex など）を指定すると、その指定がデフォルトのターゲット・ディレクトリ設定より優先されます。 **注意 :** ディレクトリ・パスは、相対パスではなく、絶対パスで指定する必要があります。 ビジネスエリアとその内容全体をエクスポートするには、-business_area_and_contents 修飾子を使用します。ビジネスエリアの定義のみをエクスポートするには、-business_area 修飾子を使用します。 -business_area 修飾子を使用してビジネスエリアをエクスポートすると、ビジネスエリアの定義と、ビジネスエリア内のフォルダへのリンクのみがエクスポートされます。フォルダとワークブックは、名前で指定した場合にのみエクスポートされます。 EUL オブジェクトを指定する場合は、表示名と識別子のいずれを使用してもかまいません。 データ間のリレーションシップを維持するには、リンクされている（または結合された）オブジェクトもエクスポートする必要があります。 export コマンドで生成される EUL エクスポート・ファイルは、XML フォーマットです。

情報	詳細

例	例 1: eul51 という名前の EUL から、「Test BA」および「Final BA」という 2 つのビジネスエリアを export.eex ファイルにエクスポートし、export.log という名前のログ・ファイルにログを記録するには、次のコマンドを入力します。
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -export export.eex -business_area "Test BA" -business_area "Final BA" -eul eul51 -log export.log`
	例 2: もう 1 つの例として、4 つのアイテムをエクスポートします。export.txt テキスト・ファイルにエクスポートするアイテムの名前を保存します。-identifier コマンド修飾子を指定すると、EUL アイテムはアイテム名ではなく識別子によって指定されます。ログ情報は export07222001.log に保存します。更新情報を保存する場合は、-audit_info コマンド修飾子も使用します。
	注意：コマンド・ファイル export.txt には、次のテキストが保存されています。
	-folder FII_ACCOUNTS
	-hierarchy FII_BANK
	-hierarchy FII_ACCOUNT_LOCATION
	-item_class FII_LOCATION_NAME
	次のコマンドを入力します。
	`eulapi -identifier -export test.eex -connect jchan/12345@my_database -audit_info -created_by ORACLE_APPS -set_updated_by ORACLE_APPS -cmdfile export.txt -log export07222001.log`

-grant_privilege

このコマンドは、指定したアクション（ドリルの使用、ワークブックの保存など）に関する Discoverer 権限をデータベース・ユーザーおよびロールに付与するときに使用します。

情報	詳細
構文	`-grant_privilege <modifiers>`
修飾子	-apps_responsibility <*responsibility*> -business_area_access <*business area*> -business_area_admin_access <*business area*> -identifier -log <*log file name*> [-log_only] -privilege <*privilege*> -role <*role*> -user <*username*> -wildcard -workbook_access <*workbook*>
注意	権限には administration、user_edition、format_business_area、create_edit_business_area などがあります。使用できる権限の詳細は、「-privilege」を参照してください。 **関連項目：**-revoke_privilege

情報	詳細

例	例 1: ユーザー JOE に create_edit_business_area 権限を付与する場合は、次のように指定します。
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -eul eultest -grant_privilege -privilege create_edit_business_area -user JOE`
	例 2: ロール USER_ROLE にワークブックへのアクセス権を付与する場合は、次のように指定します。
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -grant_privilege -workbook_access jchan."Workbook one" -role USER_ROLE`
	注意 : EUL オブジェクトを指定する場合は、表示名ではなく識別子を使用することをお薦めします。EUL オブジェクトの指定に識別子ではなく表示名を使用する場合は、オブジェクトの所有者を指定します。たとえば、jchan が所有するワークブックを指定するには、"Workbook one" ではなく jchan."Workbook one" を使用します。識別子の詳細は、「-identifier」を参照してください。
	例 3: ユーザー JOE および JCHAN にすべての管理権限を付与する場合は、次のように指定します。
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -grant_privilege -user JOE -user JCHAN -privilege all_admin_privs`

-help

このコマンドを使用すると、Discoverer コマンドとその構文および引数のリストが表示されます。

情報	詳細
構文	`-help [command name(s)] [-all]`
修飾子	*<command name(s)>* -all

例	コマンドの簡潔なリストを表示する場合
	`eulapi -help`
	特定のコマンドについての詳細なヘルプを表示する場合
	`eulapi -help <command name(s)>`
	注意 : 複数のコマンドについてヘルプを表示するには、各コマンドをカンマで区切ります。
	すべてのコマンドについて詳細なヘルプを表示する場合
	`eulapi -help -all`

-import

このコマンドは、1 つ以上の Discoverer エクスポート・ファイル（EEX ファイル）から EUL オブジェクトを選択的にインポートするときに使用します。Discoverer エクスポート・ファイルは -export コマンドで作成され、EUL オブジェクト（フォルダ、ビジネスエリア、ファンクション、または EUL 全体）が格納されています。たとえば、-export コマンドを使用してビジネスエリアをエクスポートすると、このエクスポートによって作成された EEX ファイルからビジネスエリアをインポートできます。

複数のファイルをインポートする場合、ファイル間の参照は Discoverer により自動的に解決されます。たとえば、「Emp」フォルダは A.eex ファイルに、「Dept」フォルダは B.eex ファイルにエクスポートできます。「Emp」と「Dept」を結合した場合、結合情報は両方のファイルに格納されますが、両方のフォルダの情報が格納されているファイルは存在しません。これらのファイルを両方ともインポートすると、2 つ目のファイルが処理される時点で結合が再作成されます。

情報	詳細
構文	`-import <import file(s)> [modifiers]`
修飾子	-auto_refresh -identifier -import_rename_mode <rename_new | rename_old | do_not_import | refresh> -keep_format_properties -log <*log file name*> [-log_only] -preserve_workbook_owner -auto_gen_name
注意	<*import file(s)*> 引数には、ソース EEX ファイルの名前を指定します。必ずファイルのフルパス名（c:¥data¥sales.eex など）を指定してください。 **注意 :** EEX ファイルのディレクトリ・パスは、相対パスではなく、絶対パスで指定する必要があります。 インポート・ファイル名がスペースを含む場合は、ファイル名を二重引用符（""）で囲みます。複数のインポート・ファイル名を指定するには、スペースで区切ります。

情報	詳細

例	例 1: 3 つのファイル（file1.eex、file2.eex、file3.exx）から EUL オブジェクトをインポートするには、次のコマンドを入力します。
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -import file1.eex -import file2.eex -import file3.eex`
	例 2: もう 1 つの例として、4 つのファイルをインポートします。import.txt というテキスト・ファイルにインポートするファイルの名前を保存します。このファイルには -import コマンドも入力します。ログ情報は import07222003.log に保存されます。
	注意 : コマンド・ファイル import.txt には、次のテキストが保存されています。
	-import C:¥bblock¥discover¥US¥file1.eex
	-import C:¥bblock¥discover¥US¥file2.eex
	-import C:¥bblock¥discover¥US¥file3.eex
	-import C:¥bblock¥discover¥US¥file4.eex
	次のコマンドを入力します。
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -eul EUL4_US -apps_user -apps_responsibility "System Administrator" -apps_gwyuid applsyspub/pub -apps_fndnam APPS -apps_security_group Standard -import_rename_mode refresh -auto_refresh -identifier -cmdfile import.txt -log import07222003.log`

-load

このコマンドは、データベースから Discoverer ビジネスエリアへ、オブジェクトの一括ロードを行うときに使用します。

情報	詳細
構文	`-load <business area> [modifiers]`
修飾子	-aggregate <SUM|MAX|MIN|COUNT|AVG|DETAIL> -auto_summaries -capitalize -date_hierarchy <*date hierarchy*> -db_link <*database link*> -eul <*EUL*> -description <*description*> -join <*join policy*> -log <*log file name*> [-log_only] -lov <CHAR|DATE|DECIMAL|INTEGER|KEY> -object <database objects> -remove_prefix -replace_blanks -sort_folders -sort_items -source <*source*> -user <*username*>

情報	詳細
注意	Discoverer のパフォーマンスを最大にするため、-auto_summaries コマンド修飾子を使用して自動でサマリー・フォルダを作成することをお薦めします。詳細は、「-auto_summaries」を参照してください。 データのソースを指定するには、-source 修飾子を使用します（デフォルトは現行のデータベース・サーバーです）。EUL ゲートウェイからデータをロードする場合は、ソース名は EUL ゲートウェイ名と完全に一致する必要があります。 オブジェクトのロード先となる EUL を指定するには、-eul 修飾子を使用します（デフォルトは Discoverer マネージャ自身の EUL です）。EUL を指定する場合、操作を正常に完了するには、指定の EUL に対するアクセス権限が必要です。 Oracle9*i*（およびそれ以降）のデータベースからの一括ロードを実行する場合は、Discoverer による結合の作成時にビューの制約も考慮されます。
例	例 1: 現行の接続上で、Oracle Designer のソースから eul51 という名前の EUL に一括ロードを行い、「Test BA」という新しいビジネスエリアを作成するには、次のコマンドを入力します。 `eulapi -connect jchan/12345@my_database -load "Test BA" -source "Designer 6i - bobsworkarea" -eul eul51 -user bob -capitalize -remove_prefix -replace_blanks -lov CHAR, INTEGER, DECIMAL -aggregate AVG -log load.log -description "Test BA"`

-refresh_business_area

このコマンドを使用するのは、データベースから最新の EUL 構造体を取り出すことにより、1 つ以上の Discoverer ビジネスエリアをリフレッシュするときです。

情報	詳細
構文	`-refresh_business_area <business area> [modifiers]`
修飾子	-log <*log file name*> [-log_only] -identifier -schema -source `<server|gateway>` -user <*username*> -wildcard
例	例 1: ユーザー Bob が所有する現行の接続上の Oracle Designer ソースから、eul_a という名前の EUL に存在する 2 つのビジネスエリア（「Test BA」および「Final BA」）をリフレッシュし、ログ・ファイル refba.log の情報を要約するには、次のコマンドを入力します。 `eulapi -connect jchan/12345@my_database -refresh_business_area "Test BA" -refresh_business_area "Final BA" -source "Designer 6i - bobsworkarea" -eul eul_a -user bob -log refba.log`

情報	詳細
	例 2: 識別子で指定した複数のビジネスエリアをリフレッシュするには、次のコマンドを入力します。 `eulapi -connect jchan/12345@my_database -eul eul4138_us -apps_user -apps_responsibility "Business Views Setup" -apps_gwyuid APPLSYSPUB/PUB -apps_fndnam apps -apps_security_group STANDARD -identifier -log refresh_all_bas_eul4138.log -refresh_business_area ABM_ACTIVITIES -refresh_business_area ABM_COST_OBJECTS -refresh_business_area ABM_DEPARTMENTS -refresh_business_area ABM_MATERIALS -refresh_business_area AMS_MARKETING_ONLINE -refresh_business_area...`

-refresh_folder

このコマンドは、1 つ以上の Discoverer フォルダをリフレッシュするときに使用します。フォルダをリフレッシュすると、フォルダのメタデータが更新されます。たとえば、テーブルに新しいデータベース列を追加すると、EUL は新しい列の詳細によって更新されます。

情報	詳細
構文	`-refresh_folder <folder> [modifiers]`
修飾子	-identifier -log *<log file name>* [-log_only] -source `<server|gateway>` -user *<username>* -wildcard
例	例 1: 「Sales1」および「Sales2」という 2 つのフォルダをリフレッシュして、reffol.log という名前のログ・ファイルにログを記録するには、次のコマンドを入力します。 `eulapi -connect jchan/12345@my_database -refresh_folder Sales1 -refresh_folder Sales2 -log reffol.log`

-refresh_summary

このコマンドは、1 つ以上の Discoverer サマリー・フォルダをリフレッシュするときに使用します。サマリー・フォルダの基になるクエリーが再実行され、最新データが取り出されます。

情報	詳細
構文	`-refresh_summary <summary> [modifiers]`
修飾子	-business_area *<business area>* -eul *<EUL>* -identifier -log *<log file name>* [-log_only] -wildcard
例	例 1: eul51 という名前の EUL で、「Test BA」というビジネスエリアから「Summary1」および「Summary2」という 2 つのサマリー・フォルダをリフレッシュし、refsum.log という名前のログ・ファイルにログを記録するには、次のコマンドを入力します。 `eulapi -connect jchan/12345@my_database -refresh_summary Summary1 -refresh_summary Summary2 -business_area "Test BA" -log refsum.log -eul eul51`

-revoke_privilege

このコマンドは、指定したアクション（ドリルの使用、ワークブックの保存など）に関するデータベース・ユーザーの Discoverer 権限を取り消すときに使用します。

情報	詳細
構文	`-revoke_privilege <modifiers>`
修飾子	-apps_responsibility <*responsibility*> -business_area_access <*business area*> -business_area_admin_access <*business area*> -identifier -log <*log file name*> [-log_only] -privilege <*privilege*> -role <*role*> -user <*username*> -wildcard -workbook_access <*workbook*>
注意	権限には administration、user_edition、format_business_area、create_edit_business_area などがあります。すべての権限のリストは、-privilege 修飾子を参照してください。 **関連項目：**-grant_privilege

例	例 1: ユーザー JOE から create_edit_business_area 権限を取り消す場合
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -eul eultest -revoke_privilege -privilege create_edit_business_area -user JOE`
	例 2: ロールからワークブックへのアクセス権を取り消す場合
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -revoke_privilege -workbook_access "Workbook one" -role USER_ROLE`
	例 3: ユーザー JOE および JCHAN からすべての管理権限およびユーザー権限を取り消す場合
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -revoke_privilege -privilege all_admin_privs -privilege all_user_privs -user JOE user JCHAN`

Discoverer EUL Command Line for Java コマンド修飾子リファレンス

この項では、Discoverer EUL Command Line for Java で使用可能なオプションのコマンド修飾子に関するリファレンス情報について詳細に説明します。コマンド修飾子は、Discoverer EUL Command Line for Java コマンドの詳細な指定や修飾のために使用します。次の点に注意してください。

- コマンド修飾子はアルファベット順に記載されています。
- Discoverer EUL Command Line for Java コマンドの詳細は、「Discoverer EUL Command Line for Java コマンド・リファレンス」を参照してください。

-aggregate

このコマンド修飾子を使用すると、一括ロードの実行時に使用するデフォルトの集計を指定できます。

情報	詳細
構文	`-aggregate <SUM|MAX|MIN|COUNT|AVG|DETAIL>`
使用対象コマンド	-load

-all

このコマンド修飾子は、EUL 内のすべてのオブジェクトをエクスポート対象として選択するときに使用します。-help コマンドと組み合せて使用すると、この修飾子によってすべてのコマンドのオンライン・ヘルプが表示されます。

情報	詳細
構文	`-all`
使用対象コマンド	-help -export

-apps_fndnam

このコマンド修飾子を使用すると、Applications Foundation Name（FNDNAM）の値をオーバーライドできます。

情報	詳細
構文	`-apps_fndnam <foundation name>`
使用対象コマンド	-connect
例	`eulapi -connect appsuser:appsresp/appspwd -apps_fndnam apps`

-apps_fndnam_password

このコマンド修飾子を使用すると、Applications モード EUL に接続する際に、Oracle Applications ユーザー・パスワードのかわりに Foundation Name パスワードを指定できます。

情報	詳細
構文	`-apps_fndnam_password <foundation name password>`
使用対象コマンド	-connect

-apps_gwyuid

-apps_fndnam 修飾子を使用する場合、このコマンド修飾子を使用して Gateway User ID を指定します。

情報	詳細
構文	`-apps_gwyuid <gateway user ID>/<password>`
使用対象コマンド	-connect
例	例 1: `eulapi -connect appsuser:appsresp/appspwd -apps_gwyuid applsyspub/pub`

-apps_grant_details

このコマンド修飾子を使用すると、Oracle Applications モード EUL を作成する際に Oracle Applications スキーマおよびパスワードを指定できます。

情報	詳細
構文	`-apps_grant_details <schema>/<password>`
使用対象コマンド	-create_eul

-apps_mode

このコマンド修飾子を使用すると、データベースに Applications モード EUL を作成し、その EUL に接続できます。このコマンド修飾子は -create_eul コマンドと組み合せて使用します。

情報	詳細
構文	`-apps_mode`
使用対象コマンド	-create_eul
注意	**関連項目：**-apps_grant_details

-apps_responsibility

このコマンド修飾子を使用すると、Oracle Applications ユーザーとして接続して権限を付与する（または取り消す）際に、Oracle Applications の職責を指定できます。

情報	詳細
構文	`-apps_responsibility <Oracle Applications responsibility name>`
注意	Oracle Applications 職責名は、Oracle Applications ユーザー名のすぐ後（パスワードの前）にコロン（:）を付けて入力することもできます。例を次に示します。 eulapi -connect appsuser:appsresp/appspwd -apps_gwyuid applsyspub/pub
使用対象コマンド	-connect -grant_privilege -revoke_privilege

-apps_security_group

このコマンド修飾子を使用すると、Oracle Applications ユーザーとして接続する際に Oracle Applications セキュリティ・グループを指定できます。

情報	詳細
構文	`-apps_security_group <Oracle Applications security group name>`
使用対象コマンド	-connect

-apps_user

このコマンド修飾子を使用すると、Oracle Applications ユーザーとして Discoverer に接続できます。

情報	詳細
構文	`-apps_user <Applications user>`
修飾子	-apps_responsibility -apps_security_group
使用対象コマンド	-connect

例	例 1:
	`eulapi -connect appsuser/appspwd -apps_user -apps_responsibility UK_Purchasing -apps_security_group UK_Managers`
	例 2:
	`eulapi -connect appsuser:UK_Purchasing/appspwd -apps_user -apps_security_group UK_Managers`

-asm_policy

このコマンド修飾子を使用すると、削除またはエクスポートの対象となる Oracle 自動サマリー管理（ASM）ポリシーを指定できます。

注意 : EUL ごとに 1 つの ASM ポリシーが存在します。

情報	詳細
構文	`-asm_policy <ASM policy>`
使用対象コマンド	-delete -export

-asm_space, -asm_tablespace

これらのコマンド修飾子を使用すると、ASM ポリシーに設定されている領域および表領域の値をオーバーライドして、指定した領域制約および表領域制約を使用できます。次に示すのは、有効な表領域の値と領域の値の組合せです。

情報	詳細

構文	`-asm_space <bytes>`
	または
	`-asm_space <bytes> -asm_tablespace <tablespace name>`

注意	ASM ポリシー表領域のサイズを指定するには、-asm_space <*bytes*> を使用します。 表領域と表領域サイズを指定するには、-asm_tablespace <*tablespace name*> -asm_space <*bytes*> を使用します。 **注意：**必ず有効な表領域名を指定してください。
使用対象コマンド	-asm

-audit_info

このコマンド修飾子を使用すると、Created By、Created Date、Updated By、Updated Date のいずれかのオブジェクトとともに監査フィールドをエクスポートできます。

情報	詳細

構文	`-audit_info [-set_created_by <name of creator>]`
	`[-set_created_date <date of creation>]`
	`[-set_updated_by <name of updater>]`
	`[-set_updated_date <date of update>]`

使用対象コマンド	-export
注意	**関連項目：** -set_created_by -set_created_date -set_updated_by -set_updated_date

-auto_gen_name

このコマンド修飾子を使用すると、インポートしたすべてのフォルダについて、すべてのセカンダリ要素の名前の自動生成プロパティが「はい」に設定されます。たとえば、「Performance」というビジネスエリアを EEX ファイルへエクスポートするとします。後日、この EEX ファイルから「Performance」ビジネスエリアをインポートすると、エクスポートされたファイル内の値に関係なく、Discoverer によってすべてのセカンダリ要素の名前の自動生成プロパティが「はい」に設定されます。セカンダリ要素および名前の自動生成プロパティの詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

情報	詳細
構文	`-auto_gen_name`
使用対象コマンド	-import

-auto_refresh

このコマンド修飾子を使用すると、インポートしたすべてのフォルダについて、データベースから最新のメタデータを自動的に取得できます。たとえば、「Performance」というビジネスエリアを EEX ファイルへエクスポートするとします。後日、この EEX ファイルから「Performance」ビジネスエリアをインポートすると、Discoverer によってデータ・ディクショナリから最新のメタデータが取り出されます。

情報	詳細
構文	`-auto_refresh`
使用対象コマンド	-import

-auto_summaries

このコマンド修飾子を使用すると、Discoverer の強力な自動サマリー管理（ASM）機能により、一括ロードの実行時にサマリー・フォルダを自動的に作成できます。サマリー・フォルダには、再利用できるように、クエリー済および処理済のデータが格納されています。これにより、Discoverer のパフォーマンスが向上し、Discoverer エンド・ユーザーへのレスポンス時間が最小限に抑えられます。

情報	詳細
構文	`-auto_summaries`
使用対象コマンド	-load

注意

- サマリー・フォルダおよび ASM の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

-auto_upgrade

このコマンド修飾子を使用すると、EUL への接続時に、Discoverer によって EUL が自動的にアップグレードされます。たとえば、Discoverer の新しいバージョンをインストールした場合、アップグレードが必要になることがあります。アップグレードが必要なときに -auto_upgrade 修飾子を使用しないと、接続は失敗し、エラー・メッセージが表示されます。

情報	詳細
構文	`-auto_upgrade`
使用対象コマンド	-connect

-ba_link

このコマンド修飾子を使用すると、フォルダとビジネスエリア間のリンクを削除することによってビジネスエリアからフォルダを削除できます。

情報	詳細
構文	`-ba_link <business area>.<folder>`
注意	削除されるのはフォルダとビジネスエリア間のリンクのみで、フォルダまたはビジネスエリア自体が削除されるわけではありません。 たとえば、ビジネスエリア「Video Analysis Information」からフォルダ「Stores」を削除するには、"Video Analysis Information".Stores と指定します。
使用対象コマンド	-delete

ヒント: フォルダを EUL から完全に削除する場合は、-delete -folder を使用します（詳細は、「-folder」を参照してください）。

-business_area

このコマンド修飾子を使用すると、エクスポートまたは削除の対象となるビジネスエリアを指定できます。

注意：エクスポートまたは削除されるのはビジネスエリアの定義のみで、ビジネスエリアに格納されているオブジェクト（フォルダ、アイテム、アイテム・クラスなど）はエクスポートまたは削除されません。ビジネスエリアとその中にあるオブジェクトをエクスポートまたは削除するには、-business_area_and_contents を使用します。

情報	詳細
構文	`-business_area <business area>`
使用対象コマンド	-delete -export -refresh_summary

-business_area_access

このコマンド修飾子を使用すると、データベース・ユーザー、ロールおよび Oracle Applications 職責に対して、ビジネスエリアへのアクセス権の付与（または取消し）ができます。

情報	詳細
構文	`-business_area_access <business area>`
使用対象コマンド	-grant_privilege -revoke_privilege

-business_area_admin_access

このコマンド修飾子を使用すると、データベース・ユーザー、ロールおよび Oracle Applications 職責に対して、ビジネスエリア管理権限の付与（または取消し）ができます。

情報	詳細
構文	`-business_area_admin_access <business area>`
使用対象コマンド	-grant_privilege -revoke_privilege

-business_area_and_contents

このコマンド修飾子を使用すると、エクスポートまたは削除の対象となるビジネスエリアとその内部に格納されているオブジェクト（フォルダ、アイテム、アイテム・クラスなど）を指定できます。

注意： ビジネスエリア定義のみをエクスポートまたは削除し、ビジネスエリア内のオブジェクト（フォルダ、アイテム、アイテム・クラスなど）をそのままにしておく場合は、-business_area を使用します。

情報	詳細
構文	`-business_area_and_contents <business area>`
使用対象コマンド	-delete -export -refresh_business_area

-capitalize

このコマンド修飾子を使用すると、一括ロードの際に、各列名から生成されるフォルダ名の最初の文字を大文字にするようにリクエストできます。

情報	詳細
構文	`-capitalize`
使用対象コマンド	-load

-character_set_encoding

このコマンド修飾子を使用すると、コマンド・ファイルを保存する際のキャラクタ・セット（EUC、Shift_JIS、UTF-8 など）を指定できます。たとえば、Solaris 上で日本語ロケールを使用して作成したコマンド・ファイルは、デフォルトの Java キャラクタ・セット（EUC）にエンコードされます。ただし Windows では、通常、日本語の文字が Shift_JIS または UTF-8 にエンコードされるため、Java によるコマンドの解釈が正常になるようにキャラクタ・セットを指定する必要があります。

情報	詳細
構文	`-character_set_encoding <character set>`
使用対象コマンド	-cmdfile
注意	この修飾子は、コマンド・プロンプト上で、-cmdfile コマンドの直後に指定する必要があります。言い換えると、コマンド・ファイルの内部には、-character_set_encoding コマンド修飾子を記述できません。

-condition

このコマンド修飾子を使用すると、削除の条件を指定できます。

情報	詳細
構文	`-condition <condition>`
使用対象コマンド	-delete

-date_hierarchy

このコマンド修飾子を使用すると、一括ロードの実行時に使用する日付階層を指定できます。日付階層を指定しない場合は、デフォルトの日付階層が使用されます。

情報	詳細
構文	`-date_hierarchy <date hierarchy>`
使用対象コマンド	-load

-db_link

このコマンド修飾子を使用すると、一括ロードの実行時に使用するデータベース・リンクを指定できます。

情報	詳細
構文	`-db_link <database link>`
使用対象コマンド	-load

-default_tablespace

このコマンド修飾子を使用すると、EUL を作成するときに、現行のユーザー名に対するデフォルトの表領域を指定できます。指定された値により、現行のユーザー名に対するデフォルトの表領域値が変更されます（詳細は、「Discoverer EUL Command Line for Java の使用に必要な権限」を参照してください）。

情報	詳細
構文	`-default_tablespace <tablespace name>`
使用対象コマンド	-create_eul
注意	データベース表領域名は大文字小文字を区別します。

-description

このコマンド修飾子を使用すると、オブジェクトの説明を指定できます。

情報	詳細
構文	`-description <description>`
使用対象コマンド	-load
注意	説明にスペースが含まれている場合は、*<description>* の値を二重引用符（""）で囲みます。

-eul

このコマンド修飾子を使用すると、コマンド実行の対象となる EUL を指定できます。指定した EUL へのアクセス権限が必要です。指定しない場合は、データベース・ユーザーのデフォルト EUL が使用されます。

情報	詳細
構文	`-eul <EUL>`
使用対象コマンド	-connect -load -refresh_summary
注意	*<EUL>* は、有効な EUL の名前にする必要があります。 この修飾子によってユーザーのデフォルト EUL が変更されることはありません。

-eul_language

このコマンド修飾子を使用すると、EUL の言語を指定できます。

情報	詳細
構文	`-eul_language <language>`
使用対象コマンド	-create_eul

-external_element

このコマンド修飾子を使用すると、指定したファイルからの XML コードをエクスポート・ファイルの先頭に追加できます。-external_element コマンド修飾子を使用できるコマンドは、-export コマンドのみです。

情報	詳細
構文	`-external_element <filename>`
使用対象コマンド	-export
注意	このコマンド修飾子を使用するには、エクスポート・ファイルの先頭に追加する XML コードを別のファイルに入力し、このファイルの名前を *<filename>* 引数として指定します。 -external_element コマンド修飾子は、同一のエクスポート操作において複数回使用できます（次の例を参照してください）。 *<filename>* は、EEX ファイルに追加する XML コードが記述されているファイルの名前です。
例	例 1: ファイル `custom1.xml` および custom2.xml からの XML コードをエクスポート・ファイル myBA.eex の先頭に追加するには、次のように入力します。 `eulapi -connect jchan/12345@my_database -export myBA.eex -business_area bus_area1 -external_element custom1.xml -external_element custom2.xml`

-folder

このコマンド修飾子を使用すると、エクスポートまたは削除の対象となるフォルダを指定できます。

情報	詳細
構文	`-folder <folder>`
使用対象コマンド	-delete -export

ヒント: ビジネスエリアからフォルダを削除するが、EUL からは削除しないようにするには、-ba_link を使用します。

-function

このコマンド修飾子を使用すると、エクスポートまたは削除の対象となるファンクションを指定できます。

情報	詳細
構文	`-function <PL/SQL function>`
使用対象コマンド	-delete -export

-hier_node

このコマンド修飾子を使用すると、階層内にある削除対象ノードを指定できます。

情報	詳細
構文	`-hier_node <hierarchy>.<hierarchy node>`
使用対象コマンド	-delete

-hierarchy

このコマンド修飾子を使用すると、エクスポートまたは削除の対象となる階層を指定できます。

情報	詳細
構文	`-hierarchy <hierarchy>`
使用対象コマンド	-delete -export

-identifier

このコマンド修飾子を使用すると、EUL オブジェクトを表示名ではなく識別子で指定できます。

情報	詳細
構文	`-identifier`
使用対象コマンド	-delete -export -grant_privilege -refresh_business_area -refresh_folder -refresh_summary -revoke_privilege
注意	接頭辞として親オブジェクト名が付いているオブジェクトを参照する場合は、親オブジェクトの識別子を使用して親オブジェクト名も参照する必要があります。たとえば、アイテム「Region.City」を削除するには、次のように両方のオブジェクトの識別子を使用します。 -delete -item REGION_01.CITY_01 -identifier

例	例 1: 識別子を使用してアイテム「Video Analysis Information.Store Name」を削除するには、次のように入力します。
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -delete -item DC_VIDEO_ANALYSIS_INFORMATION4.STORE_NAME01 -identifier`
	例 2: 識別子 FOLDER_01 を持つフォルダを削除するには、次のように入力します。
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -delete -folder FOLDER_01 -identifier`

-import_rename_mode

このコマンド修飾子を使用すると、インポートした EUL オブジェクトのうち現行の EUL 内の EUL オブジェクトと一致するオブジェクトの管理方法を指定できます。

情報	詳細
構文	`-import_rename_mode <rename_new|rename_old|do_not_import|refresh>`
使用対象コマンド	-import
注意	インポートしたオブジェクトと既存のオブジェクトが一致する場合、インポートしたオブジェクトの名前を変更するには、rename_new を使用します。 インポートしたオブジェクトと既存のオブジェクトが一致する場合、既存のオブジェクトの名前を変更するには、rename_old を使用します。 既存のオブジェクトと一致するオブジェクトをインポートしないようにするには、do_not_import を使用します。 インポートしたオブジェクトと既存のオブジェクトをマージするには、refresh を使用します。デフォルトでは、表示名が一致するオブジェクトがマージされます。 識別子を一致の基準とするには、-identifier コマンド修飾子を使用します。

-item

このコマンド修飾子を使用すると、削除するアイテムを指定できます。

情報	詳細
構文	`-item <item>`
使用対象コマンド	-delete -export

-item_class

このコマンド修飾子を使用すると、エクスポートまたは削除の対象となるアイテム・クラスを指定できます。

情報	詳細
構文	`-item_class <item class>`
使用対象コマンド	-delete -export

-join

このコマンド修飾子は、組み合せて使用するコマンドに応じて次の 2 通りの方法で使用されます。

- -load コマンドと組み合せる場合、-join コマンド修飾子を使用すると、一括ロードの実行時に Discoverer が結合を作成する方法を指定できます。
- -delete コマンドと組み合せる場合、-join コマンド修飾子を使用すると、特定の結合を削除できます。

情報	詳細

構文	`-load`
	`-join <NONE|COLUMN_NAME|PRIMARY_KEY>`
	-delete -join <*join name*>

使用対象コマンド	-delete -load

-keep_format_properties

このコマンド修飾子を使用すると、インポート時に既存のフォーマット・プロパティ（表示名、説明など）が維持されます。このコマンド修飾子を使用しない場合、既存のフォーマット・プロパティはインポート・ファイル（EEX ファイル）内の表示名および説明によって更新されます。

情報	詳細
構文	`-keep_format_properties`
使用対象コマンド	-import

-log

このコマンド修飾子を使用すると、コマンド・ステータス・メッセージを保存するログ・ファイルの名前を指定できます。各コマンドが実行されると、Discoverer により、コマンドが正常に実行されたかどうかを示すステータス・メッセージが記録されます。-log は、オプションで -log_only コマンド修飾子と組み合せて使用できます。

情報	詳細
構文	`-log <` *`log file name>`* `[-log_only]`
使用対象コマンド	-help 以外のすべてのコマンド
注意	*<log file name>* で指定したファイルがすでに存在する場合は、既存のログ・ファイルが上書きされます。 *<log file name>* で指定したファイルが存在しない場合は、新しいファイルが作成されます。

-log_only

このコマンド修飾子を使用すると、コマンドのシミュレーションやログ生成によって、実際のデータを変更することなく影響分析を実行できます。このコマンド修飾子を使用することにより、データを変更する前にエラーや例外の有無を確認できます。

このコマンド修飾子は、-log コマンド修飾子と組み合せて使用します。

情報	詳細

構文	`-log <`
	`log file name>`
	`[-log_only]`

使用対象コマンド	-log

-lov

このコマンド修飾子を使用すると、一括ロード時に値リストを生成する対象となるデータ型を指定できます。

情報	詳細
構文	`-lov <CHAR|DATE|DECIMAL|INTEGER|KEY>`
使用対象コマンド	-load

-object

このコマンド修飾子は、データベースから Discoverer ビジネスエリアへ、オブジェクトの一括ロードを行うときに使用します。

情報	詳細
構文	`-object <mask>` **注意 :** ワイルドカード文字を使用できます。
使用対象コマンド	-load

-overwrite

このコマンド修飾子を使用すると、EUL の作成時に、この EUL の所有者となるユーザーが所有している既存の EUL を上書きできます。この修飾子を使用しない場合、デフォルトでは既存の EUL は上書きされません。

情報	詳細
構文	`-overwrite`
使用対象コマンド	-create_eul

-password

このコマンド修飾子を使用すると、-create_eul コマンドによって作成された新しいユーザーのパスワードを指定できます。

情報	詳細
構文	`-password <password>`
使用対象コマンド	-create_eul

-preserve_workbook_owner

このコマンド修飾子を使用すると、EUL をインポートした際に、ワークブックの元の所有者がインポート後もそのワークブックの所有者になるように指定できます。

情報	詳細
構文	`-preserve_workbook_owner`
使用対象コマンド	-import

-private

このコマンド修飾子を使用すると、新しく作成された EUL に対してパブリック・アクセス権を付与しないことを指定できます。つまり、新しく作成された EUL にアクセスできるのは、EUL 所有者のみとなります。このコマンド修飾子を省略すると、新しく作成された EUL にはパブリック・アクセス権が付与されます。

情報	詳細
構文	`-private`
使用対象コマンド	-create_eul

-privilege

このコマンド修飾子を使用すると、データベース・ユーザーに対して付与する（または取り消す）権限を指定できます。権限の付与および取消しの詳細は、「-grant_privilege」および「-revoke_privilege」を参照してください。

情報	詳細
構文	`-privilege <privilege>`
使用対象コマンド	-grant_privilege -revoke_privilege
注意	<privileges> には、次のいずれを使用してもかまいません。 ユーザーまたはロールが Discoverer Administrator にログインできるようにする場合は、administration を使用します。ユーザーが Discoverer Administrator の機能にアクセスできるようにするには、個々の Administration 権限（create_summaries、collect_qpp など）を選択する必要があることに注意してください。 ユーザーまたはロールが Discoverer Desktop および Discoverer Plus にログインできるようにする場合は、user_edition を使用します。ユーザーが Discoverer Desktop および Discoverer Plus の機能にアクセスできるようにするには、個々の Desktop/Plus 権限（drill out、schedule_workbook など）を選択する必要があることに注意してください。 ユーザーまたはロールが、アクセス権のある既存のビジネスエリア内のフォーマット情報（フォルダ、サマリー・フォルダ、結合など）を編集できるようにするには、format_business_area を使用します。 ユーザーまたはロールが、ビジネスエリア、フォルダ、サマリー・フォルダ、結合、ユーザー定義アイテム、条件、階層およびアイテム・クラスを作成および変更できるようにするには、create_edit_business_area を使用します。 ユーザーまたはロールがサマリー・フォルダを作成できるようにするには、create_summaries を使用します。この権限は、同時にデータベース・リソース権限も必要とします。 ユーザーがユーザー権限を管理および変更できるようにするには、set_privilege を使用します。 **注意 :** この権限はロールには付与できません。 ユーザーまたはロールがスケジュール・ワークブックを監視および管理できるようにするには、manage_scheduled_workbooks を使用します。 ユーザーまたはロールが新しいワークシート（クエリー）の作成および既存のワークシートの変更を実行できるようにするには、create_edit_query を使用します。この権限を持たないユーザーができることは、既存のワークブックおよびワークシートを開いて実行することのみです。 ユーザーがワークブックおよびワークシートを開いたときにパフォーマンス統計を収集するには、collect_qpp を使用します。 ユーザーまたはロールがワークシート・データをドリルダウンできるようにするには、item_drill を使用します。 ユーザーまたはロールが、ワークシート内のアイテムをドリルすることにより、別のアプリケーションを起動して関連情報を参照できるようにするには、drill_out を使用します。

情報	詳細
注意（続き）	ユーザーまたはロールが、各自のワークブックへのアクセス権を他のユーザーに付与し、他のユーザーがこれらのワークブックにアクセスできるようにするには、grant_workbook を使用します。 ユーザーがワークブックを後でまたは定期的（毎日、毎週、毎月など）に実行するようにワークブックのスケジュールを設定するには、schedule_workbook を使用します。 **注意：**この権限はロールには付与できません。 ユーザーまたはロールがデータベースにワークブックを保存できるようにするには、save_workbook_database を使用します。 ユーザーまたはロールに次のすべての権限を付与するには、all_admin_privs を使用します。 ■ administration ■ format_business_area ■ create_edit_business_area ■ create_summaries ■ set_privilege ■ manage_scheduled_workbooks ユーザーまたはロールに次のすべての権限を付与するには、all_user_privs を使用します。 ■ user_edition ■ create_edit_query ■ collect_qpp ■ item_drill ■ drill_out ■ grant_workbook ■ schedule_workbook ■ save_workbook_database

-remove_prefix

このコマンド修飾子を使用すると、一括ロード時に各列名からアイテム名が生成された場合、このアイテム名から列名接頭辞を外すことを指定できます。

情報	詳細
構文	`-remove_prefix`
使用対象コマンド	-load
例	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -load "Test BA" -remove_prefix` この例では、「Stores_Store_name」というアイテムが「Store_name」としてロードされます。

-replace_blanks

このコマンド修飾子を使用すると、一括ロード時に、EUL オブジェクト名に存在するアンダースコアをスペースに置換できます。

情報	詳細
構文	`-replace_blanks`
使用対象コマンド	-load
例	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -load "Test BA" -replace_blanks` この例では、「Store_name」というアイテムが「Store name」としてロードされます。

-role

このコマンド修飾子を使用すると、データベース・ユーザーに対して権限を付与する（または取り消す）際にデータベース・ロールを指定できます。

情報	詳細
構文	`-role <role>`
使用対象コマンド	-grant_privilege -revoke_privilege

-schema

このコマンド修飾子を使用すると、ビジネスエリアのリフレッシュ時にスキーマ（ユーザー）を指定できます。

情報	詳細
構文	`-schema <schema>`
使用対象コマンド	-refresh_business_area

-set_created_by

このコマンド修飾子を使用すると、（エクスポート時の）監査を目的としてエクスポートの実行者を明示できます。

情報	詳細
構文	`-audit_info -set_created_by <name of creator>`
使用対象コマンド	-audit_info
例	例 1: eul51 という名前の EUL からビジネスエリア「Test BA」を export.eex というファイルにエクスポートし、このエクスポートの実行者を jchan と明示するには、次のように入力します。 `eulapi -connect jchan/12345@my_database -export export.eex -business_area "Test BA" -audit_info -set_created_by jchan`

-set_created_date

このコマンド修飾子を使用すると、（エクスポート時の）監査を目的としてエクスポートの日付を明示できます。

情報	詳細
構文	`-audit_info -set_created_date <date of creation>`
使用対象コマンド	-audit_info
例	例 1: eul51 という名前の EUL からビジネスエリア「Test BA」を export.eex というファイルにエクスポートし、このエクスポートが 2004 年 1 月 1 日に実行されたことを明示するには、次のように入力します。 `eulapi -connect jchan/12345@my_database -export export.eex -business_area "Test BA" -audit_info -set_created_date "1st January 2004"`

-set_updated_by

このコマンド修飾子を使用すると、（エクスポート時の）監査を目的として EUL の更新者を明示できます。

情報	詳細
構文	`-audit_info -set_updated_by <name of updater>`
使用対象コマンド	-audit_info

-set_updated_date

このコマンド修飾子を使用すると、（エクスポート時の）監査を目的として更新日を明示できます。

情報	詳細
構文	`-audit_info -set_updated_date <date of update>`
使用対象コマンド	-audit_info

-sort_folders

このコマンド修飾子を使用すると、一括ロード時にフォルダをアルファベット順にソートするように指定できます。

情報	詳細
構文	`-sort_folders`
使用対象コマンド	-load

-sort_items

このコマンド修飾子を使用すると、一括ロード時にアイテムをアルファベット順にソートするように指定できます。

情報	詳細
構文	`-sort_items`
使用対象コマンド	-load

-source

このコマンド修飾子を使用すると、データソースを指定できます。

情報	詳細
構文	`-source <gateway name>`
使用対象コマンド	-load -refresh_business_area
注意	Oracle Designer オブジェクトまたは他のゲートウェイの名前を指定するには、ゲートウェイ名を使用してください。 ゲートウェイ名は、「ロード・ウィザード」に表示されるゲートウェイ名と完全に一致している必要があります。Oracle Designer の場合には、`"Designer 6i - <workarea name>"` と指定します（Oracle Designer 6i より前のバージョンの Oracle Designer を使用している場合は、単純に `"Oracle Designer repository"` と指定します）。 -source を使用してゲートウェイを指定しなかった場合は、オンライン・ディクショナリが使用されます。

-summary

このコマンド修飾子を使用すると、エクスポートまたは削除の対象となるサマリーを指定できます。

情報	詳細
構文	`-summary <summary>`
使用対象コマンド	-delete -export

-temporary_tablespace

このコマンド修飾子を使用すると、EUL を作成する際の一時表領域を指定できます。

情報	詳細
構文	`-temporary_tablespace <temporary tablespace name>`
使用対象コマンド	-create_eul

-user

このコマンド修飾子を使用すると、操作に使用するユーザー名を指定できます。-create_eul コマンドと組み合せて使用すると、このコマンド修飾子によって、新しいデータベース・ユーザーを作成できます。

情報	詳細
構文	`-user <username>`
使用対象コマンド	-create_eul -grant_privilege -refresh_business_area -refresh_folder -refresh_summary -revoke_privilege
注意	任意の有効なユーザー名を使用できます。

-wildcard

このコマンド修飾子を使用すると、ワイルドカード文字を使用して EUL オブジェクトを指定できます（詳細は、「ワイルドカードを使用した EUL オブジェクトの指定」を参照してください）。

情報	詳細
構文	`-wildcard`
使用対象コマンド	-delete -export

例	例 1: たとえば、表示名が A で始まるすべてのビジネスエリアを削除する場合は、次のように入力します。
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -delete -business_area A% -wildcard`
	例 2: 先頭の文字が A でその後が 2 文字の開発者キーを持つビジネスエリアを削除する場合は、次のように入力します。
	`eulapi -connect jchan/12345@my_database -delete -business_area A__ -identifier -wildcard`
	この例では、開発者キーが ABC のビジネスエリアは削除されますが、開発者キーが ABCD のビジネスエリアは削除されません。

-workbook

このコマンド修飾子を使用すると、エクスポートまたは削除の対象となるワークブックを指定できます。

情報	詳細
構文	`-workbook <workbook> [-xml_workbooks]`
使用対象コマンド	-delete -export

-workbook_access

このコマンド修飾子を使用すると、データベース・ユーザー、ロールまたは職責に対して、ワークブックへのアクセス権の付与（または取消し）ができます。

情報	詳細
構文	`-workbook_access <workbook>`
使用対象コマンド	-grant_privilege -revoke_privilege

-xml_workbooks

（-export コマンドと組み合せて使用する）このコマンド修飾子を使用すると、すべてのワークブックが XML フォーマットおよびバイナリ・ラージ・オブジェクト（BLOB）フォーマットでエクスポートされます。ワークブックを XML フォーマットでエクスポートすると、エクスポートされたワークブックの定義をテキスト・エディタまたは XML ブラウザで表示できます。

情報	詳細
構文	`-xml_workbooks`
使用対象コマンド	-export

A

Discoverer EUL Command Line for Java エラー・メッセージ

この付録では、Discoverer EUL Command Line for Java で使用されるエラー・メッセージについて説明します。

Discoverer EUL Command Line for Java エラー・メッセージ

この付録には Discoverer EUL Command Line for Java で使用されるエラー・メッセージについてのリファレンス情報が記載されています。

エラー・テキスト	エラーの説明
削除するオブジェクトを指定せずにリクエストを削除します	削除する EUL オブジェクトを指定せずに、削除リクエストを指定した。
エクスポート・ファイルの作成中にエラーが発生しました	エクスポート時の EEX ファイル生成におけるファイル・エラー。
impact analysis ファイルの作成中にエラーが発生しました	-log -log_only コマンドを使用して影響分析ファイルを作成する際のファイル・エラー。
ログ・ファイルの作成中にエラーが発生しました	ログ・ファイル作成時のファイル・エラー。
コマンド・ファイル < オプション > の解析中にエラーが発生しました	コマンド・ファイルに構文エラーがある。
エクスポートするオブジェクトを指定せずにエクスポートがリクエストされました	エクスポートする EUL 要素または -all オプションのいずれも指定せずに、エクスポート・リクエストを指定した。
不完全なオプション	有効なオプションを指定したが、必要な追加オプションが指定されていない（たとえば、フォルダ名を指定せずに「-delete -folder」と入力するなど）。
無効な集計	一括ロード操作に対して無効な集計オプションが指定されている（有効なオプションは、sum、max、min、count、avg および detail）。
無効なデータ・フォーマット - 'dd/MM/yyyy HH:mm:ss' を使用します	エクスポート・リクエスト時に作成日および更新日を指定できるが、これは 'dd/mm/yyyy hh:mm:ss' フォーマットまたは SYSDATE である必要があり、そうでない場合、このエラーが戻される。
無効なゲートウェイ・タイプ	一括ロード操作に対して無効なゲートウェイ・オプションが指定されている（有効なオプションは、online_dictionary、designer および external）。
名前変更モードの無効なインポート	認識されない名前変更モードを指定してインポート・リクエストが行われた（有効なオプションは、rename_old、rename_new、do_not_import および refresh）。
無効な結合オプション	一括ロード操作に対して無効な結合オプションが指定されている（有効なオプションは、primary_key、column_name および none）。
無効な LOV オプション	一括ロード操作に対して無効な LOV オプションが指定されている（有効なオプションは、char、integer、decimal、date および key）。
無効なオプション	認識されないコマンドライン・オプションが指定されている。
無効なオプション - < オプション > は < オプション > を設定しないと設定できません	親オプションを指定せずにオプションをリクエストした（たとえば、-lov が一括ロード・リクエストのコンテキスト外で指定されているなど）。
無効なオプション - < オプション > は < オプション > の 1 つを設定しないと設定できません	有効な親オプションを指定せずにオプションをリクエストした。これは前述のエラーと同じだが、複数のコンテキストで使用可能なオプションでのメッセージである。たとえば、-folder はエクスポートまたは削除のいずれのリクエストに対しても有効。
APPS EUL の作成処理に APPS パスワードが指定されていません	Applications パスワードを指定せずに、Applications モード EUL の作成リクエストが行われた。

エラー・テキスト	エラーの説明
APPS EUL の作成処理に APPS ユーザーが指定されていません	Applications ユーザーを指定せずに、Applications モード EUL の作成リクエストが行われた。
コマンド・ファイルが指定されていません	使用するコマンド・ファイルを指定せずに、コマンド・ファイル・リクエストが行われた。
確立された EUL へ接続されていません	EUL への接続が確立されていない状態でコマンド・リクエストが行われた。
EUL の作成処理にユーザーが指定されていません	データベース・ユーザー名（または Applications ユーザー名）を指定せずに、コマンド・リクエストが行われた。
EUL の作成処理にパスワードが指定されていません	データベース・パスワード（または Applications パスワード）を指定せずに、コマンド・リクエストが行われた。
リフレッシュするフォルダまたはビジネスエリアを指定せずにリフレッシュがリクエストされました	リフレッシュ対象のフォルダまたはビジネスエリアを指定せずに、リフレッシュ・リクエストが行われた。
接続文字列を指定する必要があります	接続リクエストが指定されたが、接続文字列が指定されていない。
EUL への接続を指定する必要があります	接続をリクエストせずにリクエストが指定されている。
ログ・ファイルに名前を指定する必要があります	-log オプションが指定されたが、ログ・ファイルのファイル名が指定されていない。
エクスポート・ファイルを指定する必要があります	エクスポート先の EEX ファイルを指定せずに、エクスポート・リクエストが行われた。
インポートする .eex ファイルを指定する必要があります	インポートする EEX ファイルを指定せずに、インポート・リクエストが行われた。

B

Discoverer のコマンドライン・インタフェース間の構文の違い

この付録では、Discoverer EUL Command Line for Java と Discoverer Administrator Command Line Interface の違いについて説明します。

Discoverer のコマンドライン・インタフェース間の構文の違い

Discoverer EUL Command Line for Java は、Oracle Discoverer Administrator Command Line Interface と似ています。Oracle Discoverer Administrator Command Line Interface から Discoverer EUL Command Line for Java へコマンドを移植する場合は、次の違いに注意してください。

Discoverer Administrator Command Line Interface コマンド	相当する Discoverer EUL Command Line for Java コマンド
コマンドおよびコマンド修飾子には「/」という接頭辞を付ける。	コマンドおよびコマンド修飾子には「-」という接頭辞を付ける。
/insert_blanks	-replace_blanks
/refresh	-import_rename_mode は値 `<rename_new|rename_old|do_not_import|refresh>` を持つ。
/refresh_bus_area	-refresh_business_area
/rename	-import_rename_mode は値 `<rename_new|rename_old|do_not_import|refresh>` を持つ。

索引

D

Discoverer EUL Command Line for Java
- 概要，1-2
- クイック・ガイド，1-9
- 構文表記規則，2-2
- コマンド，1-3
- コマンド修飾子，1-3
- コマンド・ファイル，1-8
- コマンド・ファイル例，1-8
- コマンド・リファレンス，2-5
- コマンド例，1-7
- 必要なデータベース権限，1-4

E

eulapi
- クラス・パス，1-4
- コマンド構文，2-3
- コマンドの実行方法，1-4
- コマンド例，1-7
- ディレクトリの場所，1-4

eulapi 用のクラス・パス，1-4

J

Java 互換性，1-2

L

Linux 互換性，1-2

O

OracleBI Discoverer
- レジストリ変数，2-4

T

tnsnames.ora，2-6

U

UNIX 互換性，1-2

W

Windows 互換性，1-2

Windows レジストリ
- Discoverer，2-4

X

XML
- エクスポート・ファイルへの追加，2-26
- ワークブックのエクスポート・フォーマット，2-38

い

異機種間サービス，1-2

異機種間の接続，1-2

え

影響分析，1-6，2-30

エクスポート・ファイル
- XML コードの追加，2-26

お

オブジェクト
- ロード，2-30

オンライン・ヘルプ，2-12

き

キャラクタ・セット・エンコード，2-24
- EUC Shift_JS UTF-8，2-24

け

権限
- データベース，1-4
- 取消し，2-17
- 表領域，1-4
- 付与，2-11
- 割当て制限，1-4

こ

構文
　コマンド構文，2-3
　表記規則，2-2
互換性
　Linux，1-2
　UNIX，1-2
　Windows，1-2
コマンド
　asm，2-5
　cmdfile，2-5
　connect，2-6
　create_eul，2-7
　delete，2-8
　delete_eul，2-9
　export，2-10
　grant_privilege，2-11
　import，2-13
　load，2-14
　refresh_business_area，2-15
　refresh_folder，2-16
　refresh_summary，2-16
　revoke_privilege，2-17
　キャラクタ・セット・エンコード，2-24
　構文，2-3
　コマンド・ファイルの例，1-8
　使用前のテスト，1-6
　入力方法，1-4
　ヘルプ，2-12
　例，1-7
コマンド修飾子
　aggregate，2-18
　all，2-18
　apps_fndnam，2-18
　apps_fndnam_password，2-18
　apps_grant_details，2-19
　apps_gwyuid，2-19
　apps_mode，2-19
　apps_responsibility，2-19
　apps_security_group，2-20
　apps_user，2-20
　asm_space，2-21
　asm_tablespace，2-21
　audit_info，2-21
　auto_refresh，2-22
　auto_summaries，2-22
　auto_upgrade，2-22
　auto_gen_name，2-21
　ba_link，2-23
　business_area，2-23
　business_area_access，2-23
　business_area_admin_access，2-24
　business_area_and_contents，2-24
　capitalize，2-24
　character_set_encoding，2-24
　condition，2-25
　date_hierarchy，2-25
　db_link，2-25
　default_tablespace，2-25
　description，2-25
　eul，2-26
　eul_language，2-26
　external_element，2-26
　folder，2-27
　function，2-27
　hier_node，2-27
　hierarchy，2-27
　identifier，2-28
　import_rename_mode，2-28
　item，2-29
　item_class，2-29
　join，2-29
　keep_format_properties，2-29
　log，2-30
　log_only，2-30
　lov，2-30
　object，2-30
　overwrite，2-31
　password，2-31
　preserve_workbook_owner，2-31
　private，2-31
　privilege，2-32
　remove_prefix，2-33
　replace_blanks，2-34
　role，2-34
　schema，2-34
　set_created_by，2-34
　set_created_date，2-35
　set_updated_by，2-35
　set_updated_date，2-35
　sort_folders，2-35
　sort_items，2-36
　source，2-36
　summary，2-36
　temporary_tablespace，2-36
　user，2-37
　wildcard，2-37
　workbook，2-37
　workbook_access，2-38
　xml_workbooks，2-38
コマンドのクイック・ガイド，1-9

し

使用前のコマンドのテスト，1-6

て

データベース
　tnsnames.ora，2-6
　指定，2-6
データベース権限，1-4

と

トラブルシューティング，1-6
　エラー・メッセージ，A-2

へ

ヘルプ
　オンライン，2-12

も

問題
　診断，1-6

れ

レジストリ ,「Windows レジストリ」を参照

ろ

ログ・ファイル，1-6

わ

ワークブックのエクスポート
　XML フォーマット，2-38
ワイルドカード
　% の使用例，1-7
　_ の使用例，1-7
　EUL オブジェクトを指定するための使用方法，1-6